

河川懇談会への重点要望!!

国土交通省

- ◆福島・新潟豪雨による大災害から2年を経過した現在でも、雨が降ると泥濁りとなり治まる兆候すら見えない。魚類はもとより、水生動物などの生育環境にも大きな影響があるので、早急に抜本的対策を。
- ◆早出川と阿賀野川との出合地点の堆積土砂の撤去を。
- ◆小阿賀野川の樋門、閘門に資源保護の観点から魚道の設置を。
- ◆安田橋上流の「渡場床固め」に設置してある右岸魚道は、機能を果たしていないので、遡上が容易になるよう近代的な魚道設置を。などを要望する。

新潟県

- ◆河川工事の際は、自然回復や魚族保護のため大石を残すなどの措置を。
- ◆早出川ダムの放水（生態系が保持できる流量の確保）
- ◆農業用頭首工に魚道の整備改善。などを要望する。

全国内水面研修大会に参加

(開催地/富山市/十月十七日)

先進地の取り組みを学ぶ

予てから希望していた全国研修を今年実施することと致しました。
これは、都道府県が持ち回りでやっている「全国内水面振興大会」です。
意見発表を三〇五県に指定して、懸案や取組んでいる諸課題を発表して全国関係者の意見を戴くというものです。

海の無い県に学ぶ

新潟県のように海のある県は、河川の利活用という点では後進的です。海の無い山梨県、長野県、岐阜県、埼玉県などの取組は我々の創造を遥かに超えています。それは、新種マスの開発。タナゴ、ワカサギの養殖はダムに空かないほど活発におこなわれています。又、新潟県の錦鯉を冬期間、越冬のために受け入れている山梨県は、富士の豊富な伏流水を上手く利用しています。

我々が海の無い県から学ぶことは一杯あります。全国大会に参加して、他県の先進性を肌と感じ、これからの組合運営の方向を模索したいと考えておりますので、何分のご理解を戴きたいと思っております。
(視察団長/副団長/藤田正明)



〈ちゃんと帰ってきてね/安野川/阿賀野市百津地区 H25. 3. 31〉

魅力ある阿賀野川に子供たちと共に

時代を担う子供たちが「魅力ある阿賀野川」となるよう行動出来る大人になってくれることを願い、五年目となる去る四月十四日「阿賀野市立赤坂小学校六年生」は、昨春秋より採卵、飼育してきた鮭の稚魚千匹を放流した。今年は、水辺に向き（小松地区）その雄大さに感激し、地域に住んでいながら初めて見る「刺網漁・ころがし漁」を目の当りに見学した。水の匂いを嗅ぎ分け放流された場所に産卵のため戻って来ることを知り、鮭の神秘性に驚き、改めて川をきれいにすることの大切さを学んでくれた。

新五年生に受け継がれる（採卵・人工授精など）取組の中で「水道取水口周辺環境・不法投棄の現状」などを子供たちと一緒に学んで、ふるさと川の現状を自分の目で、肌で体感してもらい、川の大切さを学んでもらいたいと、今年も活動を継続して行く予定である。

※今年の鮭の放流は総て終了しているが、放流場所を目標し遡上する習性から、放流場所は、本流・支流とも可能な限り上流域を選んで欲しい。

権瓶管理委員長



環境推進委員会(委員長/松尾博)

※河川工事及び砂利採取工事請負業者に対する要望及び指導事項は次の通りである。

基本姿勢!

- ① 施工箇所の地域住民及び関係組合員等への連絡は密にすること。
- ② 作業機械の油漏れには、充分配慮すること。油の流失等があった場合は、組合事務所まで速やかに届け出ること。
- ③ 大型土嚢を設置した場合は、完全撤去すること。
- ④ 土嚢等に詰める砂利は、川砂利を使用すること。止むを得ない場合は、環境推進委員会と協議すること。
- ⑤ 工事車両の往来については、歩行者や農耕車輛を優先させること。

でたらめ!「東蒲原砂利組合」協議内容無視!

同意書発行時における協議内容は、旧石間取上線の旧渡船場下流より国道49号線釣浜橋下を通り、左岸側中州より平常水より上部の砂利採取を行なうことと、中州左岸側は、鮭漁の最盛期を避け(12月15日以降)採取すること。又、作業道路については、11月29日より準備に入ってもよいが、絶対に濁水の流出がないように配慮する。更に、採取する際には大石を残す。船下り船道の確保による砂利転石は、必要最小限に止める。サクラ鱒の遡上時は避ける。などの、協議内容であった。しかし、工事計画の詳細説明がないままに、採取に着手したことが今回のずさんな結果につながったのでは。

協議内容どおり上面だけを剥ぎ取れば、濁水は出なかった。2月16日の写真では、重機が川の中に入って掘削をしている様子である。これでは水棲動物の棲む場所はない。



2月16日釣浜橋下流

巨星輝く!



長嶋茂雄氏と松井秀喜氏の国民栄誉賞同時受賞は誠にうれしい出来事である。だが、何やら政治的な駆け引きも感じられる。我々野球世代としては、長嶋氏と松井氏が同等であるかの価値観には些か違和感がある。

長嶋さんは、一スポーツ分野だけで長けた人物ではない。日本の戦後復興、そして高度成長期をけん引した、いわゆる時代の申し子である。彗星のように颯爽と現れ、すべての日本人を魅了した。記録や数字などで測ることの出来ない巨星である。松井氏の残した足跡やその秀でた才能は、長嶋氏とは別の次元で捉えたなら、もっと受賞を素直に喜べたのではと思うと残念である。さて、長嶋氏と言えは王貞治氏であるが、二人で百本近くもホームランを打った年もあるほど「ON砲」は語り草となっている。「両雄並び立たず」と言うが、並び立たずの例である。一緒に国民栄誉賞を授賞する姿を見たかったのは私だけだろうか。

両雄と言えは、来年のNHKの大河ドラマは、「黒田官兵衛」とのことだが、共に秀吉を支えた「竹中半兵衛」とは、「両兵衛」と言われ、戦国の世に両雄並び立った稀な例と言える。ドラマではどう言ったストーリーになるのか楽しみである。黒田官兵衛は生涯側室を持たず、正室「光姫」と純愛を貫いた武将である。長嶋、王両氏も共に妻を早く亡くしたが、後にも先にも浮いた噂など皆無である。

授賞式の東京ドーム。長嶋氏が入場した瞬間。神が降臨したかのような静寂感、そして大歓声。日本人にもっとも愛された男「ミスタープロ野球」の真骨頂であった。

寄稿 野球小僧/K・M